



トロントで出会ったベーツ先生とサーロー節子さん

この夏、トロントを訪れた職員(匿名希望)が貴重な経験をされました。その中から、C. J. L. ベーツ第4代院長とサーロー節子さんにまつわる話をご紹介します(下の写真2点もご提供いただきました)。

【学院史編纂室】

◆ ベーツ先生との出会い ◆

8月5日、ロイヤル・ヨーク・ロード教会の日曜礼拝に参列されました。ここは、ベーツ先生が晩年通っておられた教会です(詳細は、池田裕子「ロリニアルから世界へ—カナダ東部におけるベーツ院長関係地訪問—」『関西学院史紀要』第19号、2013年)。

礼拝に先立ち、参列の経緯を牧師が紹介してくださったそうです。すると、「Dr. Bates!」と、隣席の女性が驚かれました。1946年にその女性が家族と一緒に初めて教会に来た時、後ろに立って微笑んでおられた男性がベーツ先生だったそうです。ベーツ先生は当時5歳だったその女性にウインクしてくださったそうです。大学関係者にとっても人気があったこと、ご病気の奥様を優しく気遣っておられたことなど、その女性はとても懐かしそうに語られたそうです。

「教会に到着した時、鳥肌が立ちました。私にとって、ベーツ先生はとても遠い存在でしたが、お会いできなくても、同じ場所を共有することで、不思議と身近に感じることができました」と、感想をお寄せくださいました。



◆ サーロー節子さんとの出会い ◆

『学院史編纂室便り』第47号(2018年5月)に掲載された「サーロー節子さんの思い出」(武田建)をお読みになって、節子さんにお会いしたいとの思いを関係者に伝えられました。その結果、7月下旬に、スタインガートまどかさん(関西学院同窓会トロント支部)、節子さんとのランチが実現したそうです。「原爆・核問題についてお話しされる時の節子さんの力強いまなざしと言葉に、これまでの苦難や乗り越えて来られたものを感じました。その一方で、『このイカフライは本当に美味しいのよ』と言って、私の緊張をほぐしてくださるなど、人を惹きつける魅力にあふれた方だと思いました」と、初対面の印象を語られました。

8月5日には、NHK制作のドキュメンタリー映像と節子さんのお話を伺う催しが日本文化会館で行われ、それにも参加されたそうです。

また8月6日には、節子さんのご紹介により、トロント市庁舎で開催された広島・長崎の写真展にボランティアとして参加され、現地の方々と直接お話しする機会を持たれました。「日本と海外では、原爆に対する受け止め方が違います。その中で、節子さんが立ち上げられたこのセレモニーが37年以上続いているのは、粘り強い信念に加え、そのリーダーシップとお人柄により、多くの人の心を動かし、行動に繋げて行かれた証だと感じました。被爆体験伝承者になることを志し、将来的には英語による伝承活動も目指している私にとって、とても大きな意味を持つ出会いでした」と、この貴重な出会いを振り返られました。

